

Remarks by Ms. Michiko OGAWA, Member, Executive Board, Panasonic,  
Professional Jazz Pianist

Hello, I am Michiko Ogawa, a member of the Executive Board of Panasonic,  
responsible for appliances technologies.

But first and foremost, I am an Osakan, a proud Osakan.  
Osaka, my hometown, opened for me many a door.

First, it was music, piano music in particular.  
Second was my company, which just celebrated a hundred years in business.

And the third, and for me, the most important door opened, on that  
memorable night, the night of Wednesday, the sixth of March, 2013, in a  
small hamlet in India, called Seetharampuram.

We journeyed some 320 kilometers east of Hyderabad. When we reached the  
tiny village, 45 kilometers inland from the Bay of Bengal, dusk had settled,  
and the village was already largely in darkness.

I say darkness because soon everywhere it was pitch black.

But the moment we turned on one of our solar powered lights...  
we saw everyone break out in smiles. A big "wow" moment, that was.

This is an accomplishment I take pride in.

Our solar powered lantern, which is this, was just about to get discontinued  
when it dawned on me that, uh-huh, we could, we should, bring the lights,

free of charge, to people in need across the globe, and that small Indian village was our very first destination, where we turned darkness to light.

And yes, may I tell you that Panasonic celebrated its hundredth anniversary this year with the completion of our plan of distributing 100,000 solar lanterns. We did it in 30 countries.

Osaka brought me to Seetharampuram.

Osaka, Kansai will lead us all to pursue our common SDGs.

Thank you so much.

小川理子・パナソニック(株)執行役員、  
プロフェッショナル・ジャズ・ピアニスト、プレゼンテーション(原本英語)

こんにちは。小川理子です。パナソニックで執行役員をしています。家電製品全般の技術が担当です。

でも、なにはさておき、私は大阪人。そのことに誇りをもっている大阪人です。

わたしのホームタウン、大阪は、私にいくつもの扉を開けてくれました。

最初の扉。それは音楽。とりわけピアノ音楽でした。

二番目は、いまの会社です。わたしの会社はまさにいま、創業百年をお祝いしています。

それから三番目の扉。これは私にとって、いちばん大切な扉です。

忘れもしません。その扉が開いたのは夜。2013年3月6日、水曜日。その夜のことでした。

インドにある小さな、シーサラムプラムという名の村でのことです。

ハイデラバードから、320キロも東に移動したでしょうか。辿り着いた小さな村は、ベンガル湾から内陸へ、45キロほど入ったところでした。

時は、夕暮れ、村に着いたら、もう暗闇に包まれていました。ほんとうに暗闇なのです。すぐに、辺りは真っ暗になってしまいました。

それはスイッチを入れた時、私たちが持参した、ソーラー・ライトのひとつを点した時でした。

みんながいつせいに、笑顔になっているのを見たのです。「うわあー」と、大きな歓声をあげたくなる瞬間でした。

これが、いままでに成し遂げたこととして、私が誇りに思っているものです。

わたしたちの、ソーラー発電のランタン。それは、こういうもの(実物を示しながら)なのですが、実は廃番になる一歩手前という時でした。

あ、そうだ、と、閃くものがあったのです。このライトを、無償で、わたしたちは配って回ることができる。いや、そうすべきだ。

必要としている人たちにしたら、地球のどこでも、そうしよう。

あの小さなインドの村は、わたしたちにとって最初の訪問地でした。暗闇を、あかりに変えた、初めての場所だったのです。

申し上げます。パナソニックは、計画どおり、ソーラー・ランタン10万個の配布を終えました。そのことをもって、今年、創業百周年を祝ったのです。

配った対象国は、30カ国です。

大阪がわたしを、シーサラムプラムに連れていってくれました。

大阪、関西は、わたしたちみんなを、わたしたちにとって共通の課題、SDGsを追い求めていけるよう、導いてくれるのです。

ありがとうございました。